

感覚共有フルダイブエロゲ

くオークに輪姦される魔法少女く

体験版

「お金が欲しい……」

間宮小雪は呟いた。

目の前の丸テーブルの上にはびっしりと書き込まれた家計簿が広がっている。その一番下の段に書かれた残高は、四桁にギリギリ届かないくらいといった有様だった。

「お金が欲しいなあー」

再び誰にでもなくそう叫び、小雪は背中からベッドに倒れこんだ。天井の電灯をじっと見つめる。そうすることでお金が稼げる天啓が降ってくることに期待したが、残念ながら神様はそう甘くはないらしい。

小雪がいるのは、比較的新しく建てられたワンルームマンションの一室。部屋は小さいが防音性や断熱性に長け、駅から遠く離れているおかげで家賃もそこそ安い。近くの大学に自転車を通う以外に外出というものを滅多にしない出不精の小雪にとって、駅との距離はデメリットにならず、安い家賃で快適な暮らしが出来るこの部屋はとても気に入っていた。

だが、安いといってもワンルームマンションである。月々の家賃出費は学生の身にはやはり痛い。住居にこだわりのない小雪本人はもう少しグレードを下げた安アパートでも構

わないのだが、心配性の両親が「女がボロアパートに一人暮らしなんて危険すぎる！」とそれを許さず、オートロック機能を有するこのマンションへの居住を半ば強制的に決められた。その分、仕送りで家賃を補助してくれてはいるが、高齢の両親に毎月家賃を払ってもらい続けるのも居心地が悪かった。

大学での勉強の傍ら、週に四日間アルバイトをしているが、都心から離れた郊外では時給も大したことはなく、生活費で全て消し飛んでしまう。

貧乏学生、というと本当の貧乏学生に怒られてしまいそうだが、それでも余暇に割けるお金が一切ないほど切り詰めた生活が続けるのは心が貧しくなっていく。

大学の友達から遊びに誘われた時に、金銭的な理由で断らなくてはいけなのは心苦しいし、最近は誘われることすらなくなった。

普通に毎日の生活は出来ているし、お金がかかる趣味があるわけでもない。けれど、毎月毎月ギリギリの生活を送るのはいい加減疲れる。

お金が欲しい。

たくさんでなくてもいい。少し心に余裕が出来るくらいでいい。

甘いものが食べたいとふと思ったとき、コンビニにふらっと立ち寄ってアイスを目の前

にして「今月はもうギリギリだから」と買うのをぐつと我慢するような、そんな侘しい思いをしなくてすむくらいの余裕が欲しい。

どこかに、ちよつとしたことでちよつとしたお金が稼げる上手い話はないだろうか。そんなことを考えていたら、いつのまにか小雪は眠りに落ちていた。

そして数日後。

「あるよ」

「は？」

小雪は自室に友人を招いていた。小学校以来の旧友で、名前は明美。

「だから、ちよつとしたことでちよつとしたお金が稼げる話」

その明美が、あつげらかんとそう言った。そして、テーブルの上の煎餅をバリバリと食べる。ちなみにその煎餅は、貧しい小雪のためにと明美が駅前のコンビニで買ってきたものだった。だがその九割は明美本人の胃袋へと落ちていく。

「なにそれ、危ない話じゃないよね」

「んー、危なくはないというか、危ないというか……」

「危ないの？」

「いやいや、危なくはないけど、んー、どうかなー。私は平気だけど」

「平気って……明美もそれで稼いでるの？」

「まあねっ！」

小雪が知る限り、明美は大学を中退しているはずだ。その後就職したという話は聞いておらず、どうやって生活しているのかは未知数だった。まさかその「稼ぎ」とやらで生活費を賄っているのだろうか。

「実は生活費どころか、好きに遊べるくらい稼いでるんだよねー。だから仕事しなくても暮らせてるし」

「何それ、株とか？ あ、FXってやつ？」

小雪は株も詳しくなければFXが何をすることなのかも知らなかったが、働かずに暮らしていけるほど稼げることと言えばそういう物だろうという認識だった。ちなみにFXは為替取引を繰り返すことで小さな勝ち金を積み上げていく手法で、余程のことがない限り一攫千金とは程遠い。

「いんや、そんな小難しいものじゃないよ」

「じゃあ何なのよ」

「んー、一言で言うなら、ゲーム、かな」

「ゲーム？」

小雪は少し考えた。ゲームとお金稼ぎがどこで繋がるのだろうか。

「大会で優勝して賞金を稼ぐとか？」

「違うね」

「あ、実況プレイ配信ってやつでしょ」

「違う違う、ゲームの中でお金を稼ぐの」

「ゲームの中……って、賭け事？」

「違う」

「レアアイテムを売るとか」

「近いけど違う」

「降参、答え教えて」

「ふふふ……それはね……」

明美はにやにやと意味深に笑って、たっぷりと溜めを作ってから言った。

「エロい男どもをぶっ飛ばして筆り取るのよ！」

「よしっ……」

明美の話の聞いてから数日後、小雪の部屋のと真ん中には真新しい機械が鎮座していた。本体は白い箱状で、デスクトップパソコンと似た外観をしている。そこから伸びたケーブルの先には、ごついヘルメットが繋がっていた。

これは最新のゲーム機、その名もヴァーチャルダイバー。略してVD。

その名のとおり、プレイヤーの精神をヴァーチャル世界にダイブ、つまりゲームの世界に入り込ませることで、まさに「ゲームの中に入って」遊ぶことが出来る画期的なゲーム機だ。小雪も存在自体は知っていたが、さして興味がなかったので実物を目にしたのはこの時が初めてだった。

「て、本当にやるの、私……」

ヘルメットを手には、小雪は熟考する。明美に聞いた話は突拍子がなく、そしてとんでもない話だったが、確かに金は稼げそうだった。そして、危ないけど危なくないというものも納得だった。しかし、その手段を本当に取る段階となると、少し躊躇する。

「ええいつ、駄目でもともと！ 死ぬわけじゃなし！」

小雪は気合を入れてヘルメットをかぶり、ベッドに仰向けで倒れこむ。そして、電源を入れた。

とたん、すつと意識が遠くなる。天井の電灯の形がぼんやりとしていき、ベッドに沈み込んでいくような感覚に襲われる。そのままベッドを突き抜けて下へ下へと吸い込まれる。電灯の明かりはほとんどと遠ざかり、あたりは暗闇に支配される。宇宙空間を浮遊しているような感覚がしばらく続き、しばらくして、小雪は両足でしっかりと闇の中に降り立った。

そして、小雪の目の前に、ド派手な演出とともにゲームのタイトルロゴが躍り出る。

夜の繁華街を彩るようなケバケバしいピンク色の文字で、それはこう書かれていた。

「セックスオンライン　　魔界の軍勢と聖なる姫騎士」

と……

「エロい男どもをぶっ飛ばして筆り取るのよ！」

数日前、明美の言葉を聞いて、小雪は目が点になった。

「ちよ、ちよっと待って、全然話がつながらないんだけど……」

「んー、これ初めから順番に話さないと伝わらないね。じゃあ最初から話すわ」
最初からそうしろと小雪は思ったが、口には出さなかった。

「まず、小雪はヴァーチャルダイバーは知ってる？」

「ああ、あれでしょ。精神を丸ごとゲーム世界に入り込ませて、凄いいリアルな世界で冒険したり戦ったりできるっていう……」

「そうそれ！ 流石ゲームオタは知ってるね！」

「昔の話よ……」

子供の頃は小雪は無類のゲーム好きだった。その縁で、同じくゲームマーの明美と仲良くなったのだ。だが、大学への受験勉強と大学進学後の貧乏生活の中で、しばらくゲームと離れて過ごすうちに、ゲームで遊ぶということがなくなってしまった。

「で、そのヴァーチャル……長いからVDって呼ぶけど、その中のゲームで、ちよっとア

ングラっぽい奴があつてね」

「アングラって……大丈夫なの、それ？」

「大丈夫大丈夫、ちゃんと認可降りてるから。で、そのゲームの名前が、セックスオンラインって言うんだけど」

「ちよちよちよつと待ってつ、何？ 聞き間違いだと思うんだけど、今……」

「うん、セックスオンライン。正式には、セックスオンラインく魔界の軍勢と聖なる姫騎士」

「セック……」

小雪は眩暈がした。この手の話題は少し苦手なのだ。別に毛嫌いしたり、差別しているわけではないが、人前でこういう単語を出すと言う事に抵抗があるというか、羞恥心を感じるタイプだった。

対して明美はあっけらかんと言いつつ。

「で、そのゲームなんだけど、なんと女性プレイヤーは基本料金無料で遊べるの。で、ゲーム内で男プレイヤーをPK、つまり倒すと賞金ゲット！ ゲーム内通貨じゃなくてガチの賞金が口座に振り込まれるから、殺しまくれば大金持ちってことよ！」

一気に説明してごくごくとお茶を飲む明美。対して小雪は頭がついていかない。

「待って、女性プレイヤーが基本無料って、男性プレイヤーは？」

「男は月額課金制で、結構高い金払わないと遊べないよ」

「そんな不公平なゲーム、やる人いるの？」

「それがいるんだよなあ。なんてったって『セックス』オンラインだからなあ」

「……まさか」

「そつ、男プレイヤーは魔族になって、女プレイヤーを好きに襲って、見事倒したら合法的にレイプが出来るのだ！」

「げえ……」

ヴァーチャルダイバーのゲームはゲーム内に入り込むリアリティだけが売りなのではない。ゲーム内で触感がかなり忠実に感じられるのが最大の特徴だ。熱いものに触れば熱いと感じ、敵からの攻撃を受ければ痛みを感じる。当然、ゲームである以上は本当に死ぬほどの痛みは感じないように調整はされているが、それでもリアリティがあることに変わりはない。

そして、それは性的な行為……つまりエロゲーにも適用される。

V Dで販売されているエロゲーは、女性に啜えてもらったり、女性に挿入しているときの感覚がとても生々しく感じられるため、一時期社会現象となったのだ。現実の風俗に行くよりも手軽で安心感があるため、童貞男たちの支持を一心に受け大繁盛した。一説には現実に帰ってこれなくなる人も出たとか。

「レイプ系のエロゲーもあるけど、もつとリアリティのあるゲームをもってことでガチで女性プレイヤーを犯せるゲームとして販売された画期的なゲームなんだよねえ」

「それ社会問題になるんじゃない？」

「最初は現代社会を舞台にするつもりだったらしいけど、流石にそれはマズイってことになって異世界ファンタジー物になったらしいよ。それに、女性側にもメリットがないとそもそも女性プレイヤーが集まらないし。NPC相手だと他のエロゲーと変わらないし。だから魔族の男VS姫騎士って設定にして、女性側にメリットを持たせたんだって。上手いやり口だよねー。『くっ、殺せー』ネタが好きな男共にも大ウケだし」

「つまり……」

小雪はお茶を一口飲んで、考えを纏めた。

「男は大金を払ってでも女性プレイヤーをリアルにレ……その、犯したくて、女性プレイ

ヤーはそういう男プレイヤーを狩ることでお金が稼げる。ってこと……?」

「そつ、ウインウインの関係ってやつだね」

「……」

システムは理解できた。だが、やはり納得するのは難しい。男が女をレイプするゲームが存在してもいいのだろうか、という根本的な問題とは別に、気になるところがある。

「ねえ、それって、女性プレイヤーが男性プレイヤーに負けた時って、その……」

「当然ガンガン犯されるよ、敗北後三十分間はログアウトが封じられるから、完全に逃げられないね。そうじゃないと男共にとってフェアじゃないし」

ログアウトを封じるのは法律に抵触するのではなかっただろうか。

「いやー、私も何度かやられたけど、あれは激しかったー」

「やられたことがあるの!?!」

「そりゃあ当然だよ。長いことやってりゃあたまにね」

なんでもないことのように明美は言った。小雪は開いた口が塞がらない。

「こつちもこつちで感覚が生々しくてさー。オークのぶつといチンコがガンガン突き上げてくんの。内臓潰れるかと思ったし、完全に孕まされるって感じだったね。アソコと口に

同時に突っ込まれた時はガチで死ぬかと思った。いやー、あれはキツかった」

「だ、大丈夫なの……それって」

「別にゲームの中の話だし、現実でやられてるわけじゃないからなんも問題ないよ。直後はちよつと気持ち悪いけど、まあ、凄いいリアルな悪夢を見たあとって感覚かな。言つたっしょ、危ないけど、危なくないって。危ないのはあくまでゲームの中だけだから」

「……」

「大丈夫大丈夫、オナニーと大して変わんないって。普通に戦つてりや戦力的にこつちが勝つし。それに、敵倒したときの賞金は上手いぜえ？ 私なんか昼間っから入り浸つて狩りしてるから、遊びながらお金も稼げてウハウハ。夜寝る前にちやちやつと入つて一匹倒すだけでも儲けもんだよ」

「……」

「ゲーム機はちよつとお高いけど、一カ月もやつてりや元が取れるからさ。騙されたと思つてやつてみなつて。あ、私がゲームに招待する形にすれば、最初から性能にブーストがあった状態で遊べるからかなりはかどるよ。なんならゲーム機代は貸すから。稼いだお金で返してくれればいいから。気に入らなければ売つてもいいから。ね？」

「……」

明美の熱弁を聞いても、小雪の気持ちはまだ一步踏み込めないでいた。確かに話は納得できた。だが、ヴァーチャルとはいえそんな風俗まがいなことをしてお金を稼いで良いのだろうか。と、小雪の中の真面目な部分がブレーキをかけた。

「私は久しぶりに小雪とゲームがしたいんだよ」

その一言でブレーキは壊れた。

一番の友人だというのに、受験勉強と貧乏生活の中でいつしか一緒に遊ぶ時間はなくなっていた。そんな友人と、再び一緒に遊べる機会なのだ。これまでの埋め合わせをする意味でも、小雪はこのゲームで遊ぶと心に決めた。小雪の真面目な部分がアクセルを踏んだのだった。

そんなわけで、小雪は初めてのV Dゲームの世界に足を踏み入れた。目の前にけばけばしいタイトルロゴがある以外は、周囲は未だに暗闇に包まれている。しかし、改めて思うがなんと直球なタイトルなのだろう。もう少し捻りを加えようとは誰も思わなかったのだろうか。いや、このチープさが逆にアリなのだろうか。よくわからない。

小雪がそんなことを考えていると、すぐ隣の空間から眩い光が放たれ、中から一人の女性が現れた。

「やっほー小雪！ 待たせたな！」

そう言つて小雪を迎えたのは、明美が操るアバターだった。

「どうよこれ、まさしく姫騎士つて感じっしょ」

確かに明美の言う通り、彼女の姿はまさしく姫騎士だった。すらりと伸びたしなやかな体軀に、豊満なバスト。その身体を覆う頑丈そうな、それでいて動きやすそうな鎧。腰には両手剣を下げている。髪は燃えるような赤色で、頭の後ろで結わえてポニーテールにしていた。

物語のヒロインと見紛うほどの美女だ。これで中身がアレでなければ。

「こんな美少女がオークにやられて悔しそうに『くっ、殺せ！』って言ったら世の男共はイチコロですなあ」

などと親父臭いことを言う明美。なぜ自分が犯される想定でそんなことが言えるのだろうか。長い付き合いだが、明美のこういう所は未だに理解できない。

「で、明美。私はこれからどうすればいいわけ？」

「まずはキャラメイクだ。ゲーム中で使うアバターを作らないとな」

明美がそう言うのと、小雪の目の前の空間に半透明の操作パネルが現れた。どうやら、これを操作することで外見を変えることが出来るようだ。

「明美のおすすめは？」

「弱そうな外見にしとけば襲われやすくなるな。返り討ちにしまくれれば大稼ぎできるからおすすめだぜ」

「真面目にお願い」

「真面目なんだけどなあ。まあ、現実の自分の身体に近い体系にしたほうが、動かすときに違和感がなくて良い感じだよ。あとは自分が男なら思わず襲いたくなるような造形にしとけばオツケー」

後半の部分は無視して、小雪は自分の体形に近くなるようスライダーを操作した。操作するたびに自分の身体が伸びたり縮んだりするのは不思議な感覚で、なかなか面白い。このキャラクターメイクは、一度決めてしまったら課金しなければ変更は不可能らしいのが残念だ。そうでなかったら、色々な体系で遊んでみたかったのだが。

「もともと小雪はロリ体形だからな。飢えた男共がホイホイやってくるな」

「んー、嬉しくない……」

小雪は成人済みの大学生の平均と比較してとても小さかった。いつも高校生、酷い時には中学生に間違われるほどだ。背が高くモデル体型の明美の隣に立つと、年の離れた姉妹のように見えてしまう。若干のコンプレックスを感じているので、もう少しゲームに慣れたら課金して巨体を手に入れやろうかという気持ち芽生える。

「バストも調節できるぜ。爆乳にしてみるか？」

「しません」

「そうだよなー。現実に戻った時に悲しくなるからなー」

「ぐっ……」

小雪は明美の大きく張った胸を恨めし気に眺めながら、バストサイズを決定するスライダーを最小値ギリギリまで動かした。気持ち大きめな値で決定ボタンを押す。

そのあと肌の色や目の色、髪の色などを決めていく。

面倒くさかったので普通の肌色や黒髪にしようかと思ったが、面白みがないからと明美に却下された。

「それに、あんまりリアルに似せすぎると、リアルで面が割れることがあるよ」

と現実的な指摘を受けたので、配色は思いきってアニメ色にすることにしました。こんなゲームで遊ぶような男に身バレするのは絶対に避けたい。

北欧系の白い肌に憧れていたので、肌の色はそちらに寄せた。そして、髪と瞳の色は明るく澄んだ水色。明美の髪や瞳が赤い色なので、それに対となるように設定した。

「職業は？」

「騎士が安定だけど、私が騎士だから、小雪は魔法使いにすれば？」

「このゲームって姫騎士がテーマなんじゃないの？」

「心が高潔な乙女ならみんな姫騎士なのだ」

「そういうものかなあ……」

そんなやり取りを経て魔法使いにした。子供の頃に映画で見て憧れた、杖から炎や氷を放つ魔法使いにゲームの中でなれるというのは、少しわくわくした。これがエロゲーでなければもっと素直に楽しめるのだが。

このゲームをひとしきり遊んだら、エロ要素のない真つ当なゲームで遊ぼうと心に決めた。

「アバター名はどうしよう」

「小雪だから雪繋がりでスノウで行こう！ 髪も青色だしちようどいいよ！ 氷魔法使
的なの！」

「うーん、それでいいか」

スノウ、と入力して決定ボタンを押す。もともとキャラクターメイキングに熱中するタ
イプではないので、ほとんど明美の趣味で形作られることになった。

「そういえば、明美は何て名前なの？」

「炎の姫騎士ミリア様とお呼び！」

「はいはいミリアね」

アケミだからミリアというのは安直だが、違和感がないのは流石というべきか。

そんなこんなで、キャラメイクの行程が全て終わり、この世界における小雪の……スノ
ウの姿が完成した。

「うっひょー！ 可愛いじゃん小雪ー、いやスノウ！」

「……」

空間に浮かぶ鏡の前で、小雪は自分の姿を眺めた。

可愛い。確かに明美の言う通り可愛い。

真つ白な肌、ほんのり朱に染まった頬、透き通るような水色の瞳と髪の毛。少し丈の余った黒いローブに、大きな魔法の帽子。木でできた杖を抱えるその姿は、まごうことなき魔法使い、いや魔法少女だ。

これが自分自身なのだと思われず、手を振ったり飛び跳ねたりしてみる。鏡の中の少女も同じ動作をしたので、確かにこの美少女は自分のようだ。少女……中身は大学生なのだが、自分の体形をリアルに再現した結果、客観的に見て少女にしか見えないことがショックと言えばショックだ。

「うっひょー！ お持ち帰りしたいー、部屋に連れ込んで服を剥ぎ取って穢れを知らない身体に煮えたぎる性欲をぶち込みたいー！」

小雪の周りを跳ね回りじろじろと見つめてくる明美が性犯罪者丸出しの発言をする。昔からこういうところのある友人なので、今更氣にすることもないのだが、これからやろうとしているゲームがゲームなだけに複雑な気分になる。

「一応聞いておきたいんだけど、女性が女性を襲うことは出来ないんだよね？」

「出来るよ」

「ぐっ……」

背後にも気を付けなければいけないと思った。いや、パーティ編成的に魔法使いである自分が後衛なのだが。この女を先に背後から仕留めておいたほうが安全なのではないだろうか。

「大丈夫大丈夫、今の目標は小雪のお小遣いを稼ぐことなんだから。そんなことしないって」

今の、という部分は聞かなかったことにしよう。

「で？ 次はどうすればいいわけ？」

「まずは酒場に行こう！ そこがゲームのスタート地点で、そこからいろんなフィールドに進めるからね！」

そう言って、明美……いやミアは、スノウの手を引いて歩き出す。けばけばしいタイトルロゴの下をくぐると、周囲を光が包み込む。スノウは眩しくて思わず目を閉じた。

そして、目を開けると、はたしてそこは酒場だった。

「わあ……」

スノウは思わず感嘆の声を上げた。

初めて体験したヴァーチャルの世界は、思っていた以上にリアルだった。

人でこった返している酒場の中は、充滿している熱気と湿気が確かに感じられる。人のざわめきや、厨房で肉が焼ける音も四方八方から聞こえてくる。空気感、というものがこれほどまでに感じられるとは思わなかった。うっかりしたら、ここがゲームの中の世界だと言う事も忘れてしまいそうだ。

「どう？　すごいでしょう」

隣に立ったミーアが言った。確かに、これはすごい。最近のゲームすげえ。

「おうミーア、やってるねー！」

カウンターでジョッキを呷っていた女が声を上げた。続けて何人かがジョッキを掲げる。ミーアのゲーム仲間だろうか。褐色の健康的な肌に、筋肉質でむちむちの身体、それを見せつけるかのような露出度の高い衣装。正にアマゾネスという言葉がふさわしい女戦士だった。剣よりも斧が似合いそうだ。

「お？　今日は二人組？　珍しいな、ていうか初めてだよな、ミーアが他の奴引き連れてるのって」

「ああ、こいつは今回が初めだから、一緒にやろうと思ってるな」

「へえー、さっすが姫騎士ミーア様。お優しいことで」

「いやあ、それほどでも」

スノウはなんだかさみしい気持ちになった。自分が一人マンションの一室で貧しい生活を送っている間に、ミーアはネットでゲーム仲間を作っている。こんなところで嫉妬してもどうしようもないことはわかっているのだが、それでもなんだか悔しい気持ちになってしまうのだった。

「で、あんた名前は？」

「え？」

唐突に話を振られたスノウは、おもわずたじろいでしまう。

「ああ、こ……じゃなくて、スノウ、です……」

うっかり本名を言う所だった。危ない。アマゾネスはニカッと笑うと、スノウの肩をばんばんと叩いた。

「スノウか！ アタシはジェーンだ、よろしくな！」

そう言って握手を求めてくるアマゾネスのジェーン。しかし体格差がありすぎて、小柄なスノウが手を伸ばすとまるで親子のように見えてしまう。

「ちっさいなーお前、年齢制限大丈夫か？」

「私は成人です！」

「そーかそーか、そいつは悪かった！ まあその体形のほうがロリコン狩りははかどるわな！」

がはははと豪快に笑うジェーン。このゲームをやる女はこんなものばかりか。

「一応初プレイの奴には忠告してるんだが、合わないと思ったたらすぐに止めるよ？ アタシは大丈夫だけど、知り合いでもやられた時のトラウマでリアルの体調崩した奴が結構いるからな」

「……」

一応ネットで事前に調べて、そういう話があることは知ってはいたが、実際にプレイしている人から直接聞くと怖気づいてしまう。やはりやめたほうが良いのだろうか。いや、これまでに散々悩んで、それでも結果は同じだった。私はお金が欲しいし、明美と一緒にゲームがしたいのだ。そのためには多少の危険性も承知の上だ。

と気持ちを入れ直し、しっかりとジェーンを見上げてスノウは言った。

「ありがとう、私は大丈夫。あなた良い人ですね」

ミーアとの仲の良さ嫉妬してしまったことが恥ずかしくて、その気持ちを振り払うため

にもスノウはしつかりとジェーンの目を見て言った。

ジェーンは一瞬きよとんとした表情を浮かべ、そしてがははと笑った。

「気に入ったよスノウ！ お前も良い奴だな。ここで会ったのもなんかの縁だ、困ったことがあったら頼ってくれてもいいぜ！」

そう言ってジェーンは再びカウンターに向かいなおった。まだまだ飲み続けるらしい。ゲームの中で飲む酒というのはどういう感覚なのだろうか。酔えるのだろうか。リアルでもアルコールの類を飲まないスノウには少し不思議だった。

「さあ、行かぜスノウ。フィールドはこっちだ」

奥の通路を指さしながらミアアが言った。返事を待たずに歩き出したので、スノウは素直にその後ろをついてゆく。

通路の奥には広間があり、そこには等間隔で円形の台座が並んでいた。その台座は淡い光を放っており、遠目から見ると光る円柱が立っているようにも見える。酒場全体がログハウスのような造形なのに対して、ここだけ場違いにSFチックだった。

「この上に乗ればフィールドでワープできる。まずは森フィールドが良いな。初心者にもおすすめだ」

どの辺が初心者向けなのかはわからないが、そもそも右も左もわからないゲームの中。とりあえずミリアに言われるがまま、台座の上へ乗った。ミリアも隣に立つ。

次の瞬間、台座から発せられる光が強くなり、このゲームにログインした時のような閃光が視界を覆いつくす。そして、その光が徐々に弱まると、そこは森の中だった。

「……唐突だね」

ぐるぐると周囲を見渡す。スノウたちが立っているのは、森の中を横切る一本の道の真ん中だった。左右を鬱蒼と生い茂る木々に囲まれる中を、土を踏み固めただけなのでこぼこした道が突っ切っている。幅は狭く、スノウとミリアが横に並べばそれだけでいっぱいになってしまう。

「うわ凄い、本当に森の中みたい」

アホみたいな台詞だが、そう言わずにはいられなかった。目に見える範囲の風景に違和感はないし、遠くからは鳥の鳴き声や、風で木々が揺れる音が聞こえてくる。草の臭いや、森の中特有の湿っぽい空気までも再現されていた。自分が受験勉強をしている間に、ゲームはここまで進化していたのかとスノウは驚愕した。最近のゲームすげえ。

「それじゃあ行くか、スノウ」

「どうして？」

「さつき酒場で見たお触れによると、この先にある村がオークに滅ぼされたらしい。私たちの仕事は、邪悪なオークの殲滅と、生存者の救出だな」

「へーへー」

「真面目にやれスノウ、今こうしている間にも、無辜の村人たちが苦しんでいるだぞ」

「……」

ゲームをやるにあたってキャラクターになりきるのは楽しむためには必要な要素ではあるが、エロゲーであるこの世界の中でそれをするのは、いささか抵抗の残るスノウであった。だいたいミアにしても、重い台詞のわりに顔がにやけている。まったく、たちの悪い姫騎士もいたものだ。

その後、ミアとスノウは変わり映えのしない森の中をすたすたと進んでゆく。最初のうちは、どこからオークが襲い掛かってくるかとおっかなびっくりだったスノウだが、あまりに何もなかったためだんだんと退屈になってきた。これでは山の中を散歩していると変わらない。

「ねえ、村ってのはまだなの？」

「もうすぐだよ」

「最初のワープの時点で村に飛ばしてくれればよかったのに」

「残念ながらそれは無理。重要な場所には直接飛ばせないから。必ず一定距離を空けた場所に飛ばして、道中は歩かせるんだよ」

「なんでそんな面倒な」

「わからない？」

「何が？」

「そんな面倒なことをする理由」

「……難易度調整のため？」

「近いな。道中での待ち伏せを可能にするためだ」

「!?!」

先に言え！

そう叫ぼうとした瞬間、スノウの左手の茂みから何か飛び出してきた。

驚き、反射的に地面を蹴って飛び下がるスノウ。その眼前を、ぶんと風を切る音とともに巨大ななかが振り下ろされ、轟音とともに地面を穿った。それは、岩を削って作ら

れた棍棒だった。

「ひいっ！」

もし直撃を喰らっていたら頭蓋を砕かれていただろう。だが安心してもしられない。棍棒の持ち主が、空を切った棍棒を握り直し、スノウへと突進してくる。

「ぎゃあああっ！」

そいつは正にオークだった。

ぶくぶくと太った巨体、浅黒い肌、局部を隠すだけの最低限の衣服を纏い、棍棒を手に持ち、豚の顔をした醜悪な怪物。オーク以外の何物でもない。空想の中の怪物が目の前に現実となって……いやゲームの中なのだが、それでも現実と見分けがつかないほどのリアリティを伴って、眼前に現れたのだ。そして、明確な敵意を持って自分に向かってくる。

「あっ……」

死んだ。と思った。全てがスローモーションに感じられた。

頭上から棍棒が振り下ろされてくるのが見えた。その棍棒が自分の頭を砕き、地面に叩き付ける未来が見えた。

逃げなきや、避けなきや。そう思えどスノウの足は動かなかった。恐怖で竦み、べった

りと地面に張り付いていた。

これまでスノウは、小雪は、明確な敵意を向けられたことはなかった。面と向かって悪口を言われたり、ましてや暴力を振るわれたことなど一度もない。小雪は今はじめて、敵意を向けられる恐怖を味わっていた。蛇に睨まれた蛙、という言葉はこういうことを指すのだと知った。圧倒的な強者から明確な敵意と暴力を向けられると、人はこんなにも恐怖を感じて竦み上がってしまう物なのか。

「はあっ！」

短い掛け声が響いた。ミーアの声だ。ひゅんっ、と先ほどよりも甲高い風切り音とともに、オークの両腕がスパンと切れて、棍棒を握りしめたまま宙を舞った。振り下ろされた勢いはそのままに、棍棒と二本の腕がぐるぐると回り、鮮血をまき散らしながらべちゃりと地面に落ちた。

オークは呆気にとられた表情を浮かべた。そしてそのまま、背後から頭を唐竹割にされて倒れた。どさり、と重たい音がした。

割れた頭蓋からどくどくと血を流すオークの背後で、返り血をべったりと顔に貼り付けたミーアが笑う。

「大丈夫？ スノウ」

「あ、ああ……」

「ん？ どうしたスノウ」

「ああああの、あのっ……」

スノウは尻もちをついたまま口をぱくぱくと動かす。身体がぶるぶると震えて、目には涙が浮かんでいた。ミアはぼんと手を叩くと、納得いった様子で言った。

「ああ、怖かった？」

「こわっ……怖いに決まってるでしょおおおっ!？」

スノウは恐怖を振り払うかのように捲し立てる。

「いきなり殴りかかられて怖くないほうがどうかしてるって！ し、死ぬかどつ、死ぬかどつ、死ぬかどつ!」

「ゲームの中なんだから死にはしないって」

「頭ではわかってても心と身体が追いつかないのっ!」

話を聞かされるのと自分でやってみるのでは天と地ほどの差があった。いきなり自分の倍近い大きさの怪物に、明確な敵意を持って襲い掛かれたら本能的に恐怖を感じるに

決まっている。スノウも昔は「ゲームの中で人を殺すようなやつは現実でも人を殺しかねない」のようにゲームと現実をごっちゃにして物を言ってくる年寄り連中に辟易としたものだが、今ならわかる。これは一緒にするわ。もうゲームと現実が近すぎる。あの時の老人たちにはゲームがこういう風に見えていたのだろう、ああ恐ろしい。

「とととにかく、私もうやめるからっ、ログアウトするからっ」

「あー、ちょっと待ってっ！」

目の前の空間に操作パネルを出現させ、指でログアウトボタンを押そうとしたスノウをミリアが止める。

「もうちよつとだけっ、もうちよつとだけ付き合ってよ」

「嫌だよっ、また襲われるのは嫌っ」

「ちよつとだけっ、先っちよだけでもいいからっ」

「そんなオッサンみたいな……」

「お金稼げないよ？」

「ぐっ……」

「お金はクエストクリア時か、全滅時にしか貰えないんだからさ。自発的にログアウトし

ちやうと、連名で受注した私の権利もなくなつちやうからさ」

「ぐぐぐつ……」

スノウは歯噛みして悩んだ。そう、男を倒して巻き上げた金は、ログアウトでは取得できない。クエストをクリアするか、ゲームオーバー、すなわち男たちにやられてやられるまでは貰えないのだ。

「せつかく怖い思いしたんだしき、何も得られないまま帰るのはもつたいないでしょ」

「ぐぬぬぬ……」

もつたいない、という言葉はスノウの座右の銘でもあった。せつかくゲーム機を買って、時間をかけて、怖い思いをしたのだから、それを取り返す分には……と考えてしまう。スノウは損切りのできない性格だった。

「だからとりあえず最後までいてよ、戦わなくてもいいからさ」

「……本当に？」

「おおよ、私が全部倒してやるから」

そう言って力こぶを作って見せるミア。スノウは盛大にため息をつき、心を決めた。

「……やるよ、やりますよ」

根負けした様子でスノウは呟く。乗りかかった船だ、最後まで行ってやろうじゃないかと半ばヤケクソだった。

「本当に守ってよね！？ さっきみたいなのは御免だからね！」

「はいはいわかってますって」

ホントか？ とスノウは訝しむが、ミーアはけらけらと笑いながらさっさと歩いて行ってしまう。置いていかれると、また何に襲われるかもわからない。スノウは慌ててミーアの背中を追ったのだった。

体験版は以上になります